

編輯部報情閣內

週報

號日三月五

第三三號

昭和十四年五月三日

（第一回水曜日發行）



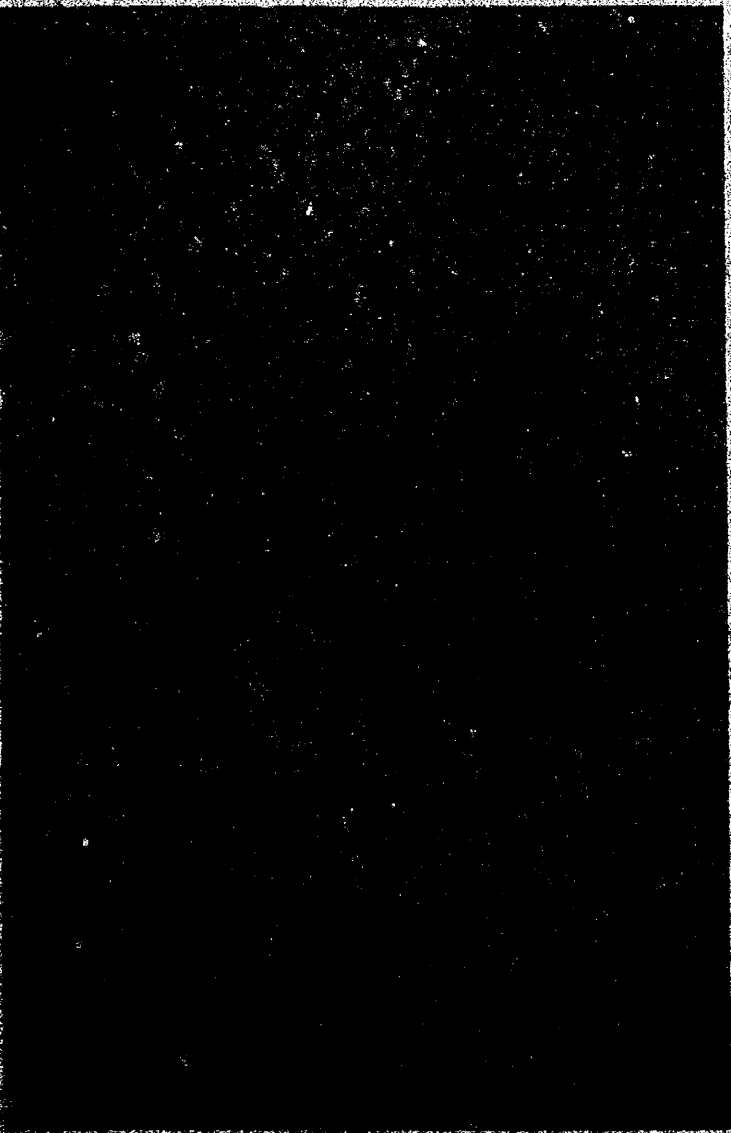
新東亞
讀本

5 東亞資源政策小論

赤色援蔣ルート	性病と國民の純潔	結核の話	榮養の話	母性、乳幼兒の問題	戦争と國民保健
---------	----------	------	------	-----------	---------

五錢

露光量違いにより重複撮影



週刊 幸反

新東報 本誌 (6) 東亞資源政策小論 東亞研究所 大上末廣 著

目次 (五月三日発行)

戦争と国民保健 厚生省 二
母性・乳幼児の問題 三
禁煙の話 九
結核の話 一五
性病と国民の純潔 一九
—— 国際時事解説 ——
赤色援護ルート 外務省情報部 二四
国民精神動員の二策 三〇
最近公布の法令 内閣官房情報課 三六

四月廿一日(土)

▽海軍航空隊、内地、福州その他中支各省に互り大規模な飛行、マイタリーとユーゴスラヴィアの会談が行はれた結果、兩國の友好関係確認さる。▽四ノルントハンが航空會社の訪日親善ガレンツ探ベルリニ出發。▽イラン國皇太子御成婚式

四月廿二日(日)

▽朝日新聞社招魂式遺族二萬參列して賑かに行はる。

四月廿四日(月)

▽けふから精神社臨時大祭はじまる。▽南米ボリブリア大統領ヘルマン・フツシ中佐は全米主義政體樹立を宣言す

四月廿五日(火)

▽天皇陛下、午前十時十五分朝日新聞社に御幸、御親拜、同時に國民獻禮の時、同社に御行はる。

▽敵の、四月攻勢、駿河川と北支那より發表さる。四月廿日までの敵の遺棄死體二萬四千二百七十八。▽山西東部を匪軍總攻撃。▽獨逸會談ベルリンに行はる。▽ルーズヴェルト大統領、行政機構大改革を發表

四月廿六日(水)

週間日誌

▽内務省の朝鮮國道豆トシネム、陸産側についでけふ通過。▽英政府、歐洲情勢に備へて徴兵制實施に決し、けふチエンパレン首相會で聲明、召集される壯丁は三十一萬と推定さる

四月廿七日(木)

▽天皇陛下は陸軍航空士官學校第一回卒業式に初の行幸

▽支那事變第十回勳功行賞發表さる。(陸軍四八一四名、海軍一五九名、計四九七四名)

▽四重羊毛の購買制限實施さる。▽アムステルダム、アムステルダム新聞記者

▽訪日ドイツ新聞記者團、海軍大將リハルト・ゾルゲ一行來朝

▽國民精神動員委員會第四回總會、時局認識徹底方針と物資活用並びに消費節約方針とを決す

▽中央物價委員會で、物價統制大綱を決定

今週の暦

▽五月二日(火)地方長官職はじまる。(九日まで) ▽五日(金)端午節



戦争と國民保健

厚生省

「まづ健康—健康こそ、すべての活動の源であり、力である。健康のないところに明るい人生もなければ、旺盛な國家の活動も起り得ない。わけても戦時下の日本、東亞新秩序建設といふ大事業を行つてゐる我が日本にとつては、國民健康の問題は國家の重大關心事であり、切實な問題である。

一旺盛な體力と氣力、それを要求するのは決して前線のみではない。事變の長期戦化、それに伴ふ

銃後國防の萬全を期するためには、銃後のみんなが、健康を増進し、體力の向上につとめ、いはゆる國家の人的資源の強化充實をはからねばならぬ。

厚生省では、この意味で五月二日から八日に至る一週間、健康週間を實施し、銃後健康報國の實踐を強調してゐるが、今こゝに「戦争と國民保健」と題して當面の問題たる、國民營養の改善、母性乳幼児の體力向上、結核と性病の諸問題について、實情と解決を試みることにした。

第一篇 母性・乳幼児の問題

現下の時局に、戦線でも銃後でも、先づさしづめ要求されるのは、青年や壯年の體力である。然し當面の戦闘に勝つばかりでなく、いはゆる長期建設をなし遂げるためには、乳幼児の體力、更に進んではその母胎たる女子の體力さへもが、國力の源泉として深く考慮が拂はれなければならない。

何となれば、この輝かしき勝利も、これを託すべき後継者たる次代の國民が、その量に於いて少くその質に於いて弱かつたならば、これを維持することが困難であるからである。

今、この母性・乳幼児問題といふ立場から我が國の現状をみると、我が國では、戦闘行為がはるか遠い大陸で行はれてゐて、國民は敵襲に對して少しも危惧の念を抱くことなく晏如として生活できるし、衣服でも營養でも奢侈に互りさへしなければ、平時と全く異ならない位だから、歐洲諸國殊にドイツが、あの歐洲大戦の際に經

驗したやうな條件と較べると格段の開きがあり、この方面での母性・乳幼児の體力低下が、殆んど見られないのは何といふ幸福なことであらう。

然し過去のどの戦争よりもはるかに大規模な今度の事變に際しては、國民の量即ち出生數に相當の影響を與へつゝあることは、昭和十三年七月以降、出生が前年に比して毎月約二萬から三萬を越える程度の減少を呈してゐる事實に徴しても明らかであらう。

この乳幼児が、實は、明日の國家の生産力、國防力の保障となるものだから、事變下に於ける幾多の國民保健問題の中でも、この母性・乳幼児の體力對策こそ銃後國民にとつて喫緊の要務であると云つても過言ではない。

そも、人口増加の積極的要素である出生の増加には、國民のすべてが、どの年齢の者もみんなが之に關與することは出来ないが、消極的要素の一である



乳児死亡の減少については、殆んどすべての國民が—この問題の解決に貢献できると云へる。固より乳児死亡率が事變に因つて如何に左右されつゝあるか、まだ正確な数字になつて現はれてゐないが、地域により階級によつては、多少の影響が存するものと豫想しなければならぬ。

われは、こゝ暫くは續くだらう出生減に因る被害を少しでも軽くする意味に於いて、血眼になつて乳児死亡の原因を突きとめ、その除去に努めなければならぬ。もし今年と同数の壯丁数を二十年後に保持しようとするならば、今年生れ出る乳児は一人も失つてはならないのである。

世間には、自然淘汰の考へから、弱い子供が早く死に、強い子供ばかりが生き残るのだから、富國強兵のためには乳児死亡などは、それほど意に介しなくてもよいではないかと云ふ人もある。固より生れて幾日も経たないうちに死んでしまふ乳児の中には、生れつき體質の弱い、育つ見込みの少ない者の數も少くはなからぬ。

しかし、こんな先天的な原因もさることながら、生活環境の改善に依つて、もつと端的に云へば、乳幼児

各國に於ける人口千に對する人口の自然増加

國名	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十八年	昭和十九年	昭和二十年
日本	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0
イギリス	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7
フランス	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6
イタリア	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5
ソ連	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4
アメリカ	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3
ベルギー	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2
オランダ	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1
ドイツ	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0
ポーランド	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
チェコスロバキア	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ハンガリー	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ギリシャ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
トルコ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
インド	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
中国	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ソビエト連邦	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
フランス	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
イギリス	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
アメリカ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ベルギー	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
オランダ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ドイツ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ポーランド	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
チェコスロバキア	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ハンガリー	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ギリシャ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
トルコ	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
インド	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
中国	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9
ソビエト連邦	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9

の周圍から無智と貧困とを除くことに依つて、先天的なものに原因しない乳児死亡は激減すると見て 差支へない。

何故なら、同じ環境では弱い子供の方が早く死ぬであらうが、乳児それ自身が太健弱いのだから、どんなに強い乳児でもその外界に對する抵抗力といふものは、たかが知れたものである。



早く死んだから弱いと諦めてゐた乳児の中にも、養護の方法さへ誤らなかつたら、最初の生命の危機を切

り抜けて、將來強い國民となり得た者も數多くあつたであらうし、現在、社會の第一線に丈夫で元氣に働いてゐる人達の中にも、幼ない時には弱くて到底育つ見込みがないといはれた人も少くないであらう。

かう考へてみると、毎年々々二十數萬人の乳児が失はれてゆくとは、何と云ふもつたないまた腹立たしい現象であらう。

貧困は、しばしば母性・乳幼児の體力を蔑ろにする。母性・乳幼児の保護が、夙に社會事業として發達した理由は實にこゝにある。

然し富裕は、常に母性・乳幼児の體力を向上せしめてゐるであらうか。經濟上、何等不安を感じない階級の子供は、榮養や鍛錬の點からも正しい養護を受けてゐるであらうか。寧ろ彼等の中には、洗練されない物質主義的な寵愛の對象として、暖衣飽食無爲の習慣に乳児の時代から染まつてゐる例も決して乏しくないのである。

そこで、貴賤貧富を問はず、全國の母性・乳幼児の體力向上のために、昭和十四年度に於いて、先づ乳幼児の檢診と母性に對する指導とを實施して、一般育兒思想の

普及向上を圖ることとなつたのである。

當局の施設としては、先づ乳幼児に對して検診を行ふ。

検診は、開業醫師や公私の病院、診療所等の醫療施設や保健所、健康相談所等の指導機關に依つて行はれるが、市町村を始めとして、あらゆる關係諸團體が、この意義ある事業に總動員されて協力することになつてゐる。

検診の時期は、地方の實情に應じ、多少遅延もあるし、農繁期等の關係も顧慮しなければならぬが、大體五月から九月までの間に、生後一、二ヶ月から一年一、二ヶ月経つた子供全部を少くとも一回、事情が許せば、できるだけ何度も醫師の検診を受けるやうにする。固より生れて間もない子供を戸外に連れ出すことは、實際上の問題として困難でもあるし、母子ともにその健康上面白くないから、お宮参りでも済んでからにする豫定である。

また、原則としては、適當な場所、日時を定めて一

齊に検診を行ふことにならう。

検診の際には、先づ乳児の榮養状態を仔細に觀察し、病氣の有無を診察し、その際測つた體重とを綜合して、育兒上適當な指導を與へることとする。

検診の結果は、その要旨を検診用紙に記入すると共に、體力検査證にも、育兒の參考となることを記載して、之は保護者に交付することとする。

この體力検査證の裏面には、満一歳までは一月毎に、一歳以上は大體一年毎に、我が國乳幼児の標準體重が記載してあるから、保護者は我が子が健康な發育をしてゐるかどうかを、検診後もずつと參考出来る仕組みになつてゐる。

検診の効果を發揮させるために、検診時以外にも育兒上の指導が常に続けられなければならない。

そこで關係官公吏が中心となり、各種團體が連絡協調し、講習會・講演會・映畫會・展覽會等を開催して一般國民に對して育兒思想の向上を圖ると共に、醫師會・産婆會・看護婦會等の保健關係團體の活躍によつて、個々の家庭に於ける育兒上の指導をもすることになつてゐる。

そして一方、平易周到に育兒方法を記述した指導用の小冊子「子供の育て方」を、今年になつて子供の生れた家庭に漏れなく贈り、五月以降は、なるべく區役所・市役所・町村役場で出生届を受理した際に交付する手筈になつてゐる。

世間には、教育が普及し知識が向上した今日、こんな検診や指導をやつても、大した意義がないと考へる人もないとは限るまい。

しかし、離乳の時期や方法についても、まだ指導の餘地が存することは、母乳で養はれてゐる時期は、農村の子供の方が發育がよいのに、幼児期になると、かへつて都會に劣つてしまふといふ學者の言からも察せられるし、實際、地方には體力向上の見地からは、好ましくない育兒に關する風習が、あらゆる階級を通じて残つてゐる所も少なくないやうである。

また、農村で死産や流産を少くし、乳児死亡を減らすためには、農村の婦人が妊娠・分娩・産褥を通じて、もつと養護せらるべきであるといふことが叫ばれてゐるが、これは非常時産業の勃興發展に伴ひ、獨り農村に限らず、工場地帯の母性に對する警告にもなるのである。

かゝる母性・乳幼児の社會的保護の範圍外に屬することだが、例へば、ある有産家庭の母親が、母乳の他に米の粉を用ひて育てられてゐる近隣の子供が、乳児審査會で優良な成績を得たと聞くと、即座に豊富な母乳をやめて、わざわざ米の粉といふ不完全極まる食品だけに變へ、しかもそのために愛兒を榮養不良に陥らせたといふやうなことがある。これは一些事には過ぎないであらうが、世の母親たちに、また將來母たるべき女性に、正しい育兒の知識を骨の髄まで浸み込ませることが、一見、迂遠の方法のやうで、實は定石であり、捷徑であることを物語つてゐる。

適切な指導が與へられないばかりに、防ぐことの出来た死を防げないで悲嘆を重ねてゐる親が年々歳々如何に多いかは、かゝる世間の隅の小さな事實が積り積つて、乳児死亡三千數萬と云ふ數字になることからも確認されるのである。

況んや、乳児死亡の際には、死にまで立ち到らなくとも、病氣にかゝつて體力の低下を來たしてゐる何層倍も

各國の乳児死亡率 (生後百ニ付キ一歳未満者ノ死シ)

年	日本	イギリス	フランス	イタリア	ドイツ	アメリカ	ベルギー	オランダ
明治三十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治三十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治四十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治五十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治六十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治七十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治八十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十一年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十二年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十三年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十四年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十五年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十六年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十七年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十八年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治九十九年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六
明治一十年	二七	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六

の乳児があることを思ふと、いよ／＼検診指導の重要性が倍加されるのである。

嘗ては、「多く生み、多くを失つても國家として痛痒を感じなかつた時代から、「少く生み良く育てよう」とする思想が國民の一部に侵入した時代を経て、今や、かゝる無智やかゝる誤謬を清算して、「多く生み多くを良く育てる」ことが、全國民に要求される時代となつた。

この事は、自然であり正しくもあるが、やゝもすれば、この自然な正しい方向を、従來は社會的條件や衛生的環境が邪道や無軌道に逸れさせようとし勝ちであつた。

こゝにも、母性・乳幼児の體力問題が、この時局に直而して、國力の源泉としていよ／＼その重要性を加へたのであるが、全國の母性はこの非常時健康週間に際して、克くこの趣旨を徹底し、家に在り内に在つて國運の進展に寄與せられるやう祈つてやまない。

第二篇 榮養の話

保健食とはどんなものか

われ／＼の生活現象は榮養に依つて保障されてゐる。従つて榮養は、われわれが健康に生存して行く上に、體位を向上して能率よく勞作を営む上に、且つは長壽を完うして人生の眞の幸福を享樂する上に、大きな關係があるのである。榮養が悪いと健康を害ふことは、誰しも考へつくことであらうが、近來の榮養學の發達はこの間の因果關係を明確に實證し、その事例は枚舉に遑ない迄に上つてゐる。

凡そ榮養を得るために飲食を齎めるわけだが、徒らに食欲に任せ、腹加減に委せて飲食する風習は、保健上經濟

上、また人生百年の計を擧ぐる上に於いて、決して合理的の方法とはいへない。現代科學の進歩から觀て、全く原始的の誤りを免れない食物の擧り方である。

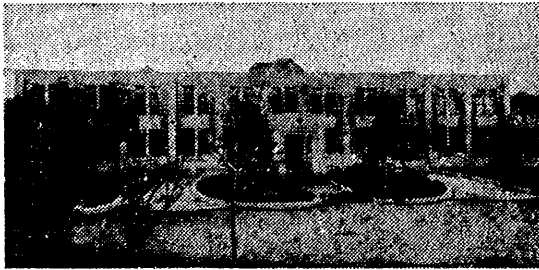
文化の進運と科學の發達に伴ひ、われわれ人間が一日もゆるがせに出来ない榮養の問題を、漸次科學的に取扱ひ、生理的に検討するに至つたといふことは、まことに當然すぎる程當然な成行である。即ち、明治九年フォイト氏は「試食法」に依る人體試験を遂げて、習慣上の保健食より一步進めてあの有名な「生理的保健食」を發表したのである。そのころ多くの研究者によつて相前後して生理



でもない。カルシウム等無機質についても同じである。ともあれ、飲食をして栄養上合理的ならしめ、保健の目的に適合せしめるためには、その中にカロリー源も、組織の補修源も、また無機質もビタミンもいづれもが不足を避べ、充實整備せられ、しかもわれわれの生理的に要求する量を満足させねばならない。この目的のために、即ち保健食採取のためには、先づ正しい献立を作製する必要がある。献立の作製には、要求カロリーと蛋白質とを主眼にすべきである。さりながら、無機質やビタミンを無視してもよいと云ふ譯では決してない。無機質、ビタミンの類は、いよく調理するに當つて、三大栄養素の外にその配合に意を用ひ、調理の操作中に損失逸出のないやう、或ひは場合に應じては更めて之を加へもするやう、最善の注意を拂ふべき

である。即ち調理法を従前通り無頓着な野育ちのままに放任せず、科学的に合理的に取扱ふことが肝要である。尙ほ又、無機質、ビタミンの如き大切な栄養素は、日常食品の中で大體不可食分として廢棄されるやうな部分、例へば内臓、皮はだ等の所に濃密に含有されてゐる場合が多く、従つてこれ等の部分の調理或ひは加工に充分工夫をこらして食膳に上せるならば、保健上のみならず、廢物利用、消費經濟の上からも一石二鳥である。ところで、如何に以上の諸點に留意しても、從來から用ひられてゐるフオート氏式の保健食の献立法では、即ち朝食はその内容極めて貧弱なるものを攝つても、食後之を補足し、また夕食は甚だ簡単な辨當で済ませても、夕飯の御馳走で埋合せ、一日全體として所要量、所要成分を満たせば足りるといふ方法で

は、なほ保健上最善の成果を齎し得ない事實を、最新の栄養學は教へてゐる。そもぐ各種の栄養素は、それぐ獨



所 究 研 養 榮

へつて害的にさへも作用するといふ場合がある。各種の栄養素が生体内で營養的に活躍するためには、それぐの成分が相協力しなければならぬといふ密接な相互關係があつて、二つ或ひは三つの成分が同時にそこに共存して、初めてその成分も營養的によくその効果を擧げ得るのだといふ事實が、實驗的にも證明されてゐる。例へば、含水炭素とビタミンB₁の如く、又カルシウムと磷とビタミンDの如く、いはば「鹽と糖」或ひは「鐵と炭」のやうな關係に在る。従つて、日常三度の食事も、これに依つて營養の第一眼目たる健康の保持増進を期待する以上は、その一回々々の食事の中に必ずそれぐの成分が偏頗なく存在し、よく均衡の整つたものでなければならぬことが言かれる。換言すれば、朝食は含水炭素、糖はビタミンB₁と云ふのではなく、朝昼夕の毎回食の内容が質的に

も量的にも充實合理化せらるべきであることが判る。この進んだ見地に立つ營養上の考へ



科學的な調理場

では「成長」或ひは「恢復體重」を營養の標として研究を進め、化學的製品を配合した食餌を以つてしても、自然に存在する食品を配合した食餌を以つてしても、また自然の食品を一旦化學的に數部分に分別し更めて之を配合した食餌を以つてしても、その一日分の材料と分量とは全然同一であるにもかゝらず、毎回食を均等にして、その組成を合理化して分けて與へた甲の場合が、毎回食の各成分が偏頗で、即ちフオート氏式の方法で投與した乙の場合にくらべて、毎回甲が乙よりも遙かに優秀な成績を収めるのである。この實驗は白鼠、犬、兎等動物試験ばかりでなく、人體についての試験に於いても、例外なしに右の結果が見られるのである。この學術的實驗成績の指示する大自然の法則を實際化するため、毎回食の組成の整備合理化に眼目を置き、こゝに「單位式獻立」(營養獻立)が

創案されたのである。
 單位式獻立法の要領は次の通りである。

主 食	2400カロリー	蛋白質	80グラム(普通男子平常一日量)
副 食	1017		83.9 (七分白米3.8合中食量)
	4) 789		40.7 (副食物中に含むべき量)
	195.9		11.7 (同上量)
			12グラム(一單位)を得

實用値としては200カロリー

而して、主食は一日分を三分して朝、晝、夕各、その一分を用ひ、副食は一日分四單位となし、朝一單位、晝一單位、夕二單位を供する。「單位式獻立」は學理的に今日見る最上のものであるばかりでなく、實際的にも種々な特徴を有し、また経済的にも甚だ有利である。現在、各地方廳で營養指導員の手により實施されつゝある各方面に於ける營養改善の例を始めとし、學校、

工場、その他の集團、部落、組合等のこの種事業で、この單位式獻立法に則る。保健食を給與してゐる向では、例外なしに、保健食は勿論、能率上、教育上、且つ精神上にも極めて良好な成績を収め、同時に經濟上にも亦甚だ見るべき實績を挙げつゝあり、既に今日迄にその實績の世に公表されたるものも枚舉に遑なくあらざる。



農業期共同炊事
 埼玉縣七木村の共同炊事は組合員二十戸の畑きん十名が交代で毎日二名宛でやつて居る。これは重箱をもつて配給を受けて居るところ。

要するに保健食は、いはば原始的な食慾をかせ時代から、明治初年のフオート氏式の保健食時代に推移し、尙ほ明治の末期から大正に至りビタミン補給時代とも稱すべき一時期を翻し、大正十二年の頃から、更に躍進して最合理的なる單位式獻立時代の今日に進歩して來たのである。

第三篇

結核の話

最近一ケ年に十五萬人に近い死者を出し、百五十萬人と推定される患者を病床に呻吟せしめてゐる我が國に於ける結核病の蔓延は、國民健康上最大の缺陷であり、ひいては國力の消長にも關する重大事である。

結核は古くから人類を悩ましてゐた病氣であるが、文化の發達がそれ程でもなく社會生活の單純であつた時代には、この病氣の被害の及ぶ範圍は主として家族的關係に限られてゐた。結核が家系病といはれ或ひは遺傳病と考へられてゐたのもこのためである。ところが文化が發達し社會生活が複雑となるにつれて、結核の社會的蔓延が猛然と起り、世界のすべての文明國がこの病氣の國家的侵害を蒙るに至つた。その一方では、この怖るべき社會的疾患を防がうとあらゆる方面から努力が傾倒され始めた。その結果、先づ一八八二年の結核菌の發見によつてこの病氣が傳染病であることが確認さ

れ、従つて撲滅の途も傳染病豫防方策の通則によるべきことが明らかになつた。一方、診斷治療に關する醫學の進歩によつて不治の病といはれてゐたこの病氣も、早期に發見し早期に治療すればその多くを治し得ることも實證されて來た。

そこで歐米諸國は競つて本病の撲滅を目ざして精進した。即ち先づ結核病に對する認識の是正と豫防思想の普及に努め、結核療養所を建設し結核患者を之に收容して、病毒の傳播を防ぎ、結核豫防相談所を設けて患者の早期發見、早期處置に努めたのである。

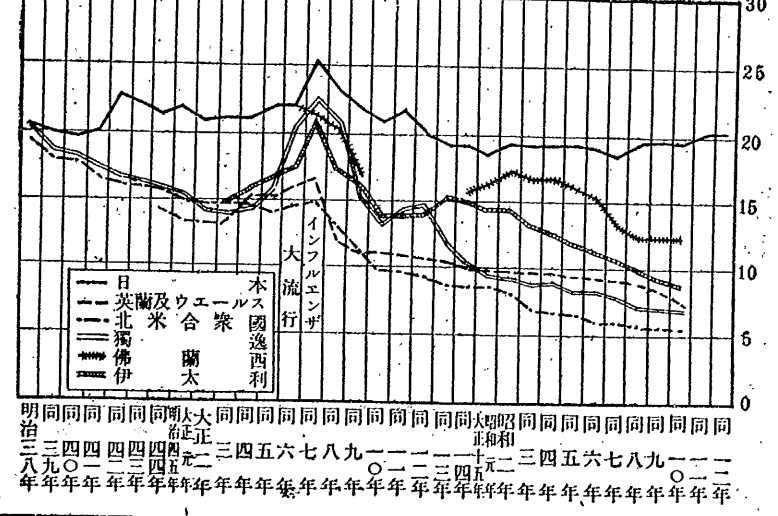
このやうな結核豫防事業の効果は、本事業の振興に逸早く努力した英・米・獨等の諸國に於いては既に一九〇五年頃より顯はれ始め、やゝ遅れて豫防事業に着手した伊佛その他の諸國では少し遅れながらその効果を見せ始め、かくして歐米諸國の結核死亡率は緩やかな傾斜を以つて徐々に降下する様になつた。途中世界大戦

と、インフルエンザの世界的大流行の影響を受けて各
 國の結核死亡率は一時著しく上昇したが、當時既に
 相當數に達してゐた豫防施設の力によつてよく之を抑
 壓し、以後その結核死亡率を順調に低下せしめて最近に
 及んでゐることは圖表に見る如くである。即ち本世紀の
 當初に於いては人口一萬對二〇前後を示し、大戦と共に
 これ以上の高率となつた各國の結核死亡率は最近に於いて
 は英・米・獨・伊の一〇以下、わけてもアメリカの如きは
 五に近い低率となり、結核撲滅の理想實現をも目前に見
 ようとしてゐる現況である。

之に對してひとり我が國のみは殆んど舊態依然たる高
 き結核死亡率を示し、年々莫大なる人的資源を損耗し、經
 済上産業上にも少からぬ損害を蒙つてゐるのは、國民
 の結核豫防に對する正しき認識の不足であることと共
 に、我が國の結核豫防事業が最近に至るまで甚だ不振で
 あつて、結核豫防施設も亦著しく不備であるといふこ
 とに歸すべきものと考へられる。

我が國の結核豫防事業に國家が關與したのは、大正三
 年に肺結核豫防上療養所の設置並びに國庫補助に關する
 法律が公布されたのに始まる。その後内地主要都市に公立

比較死亡結核國要主 (人口一萬對ニ對スル死亡數)



結核療養所が設置され、次いで大正八年の「結核豫防法」
 の公布、昭和十一年の同法の改正並びに療養所擴充計
 畫の樹立等によつて、國立及び府縣立療養所も建設され、
 本年三月末日現在に於いて、二府十縣二十市に三十二の公立
 療養所を有しその病床六千四百五十七となつてゐる。
 尙ほ建設中の公立療養所は二十一ヶ所五千九百三床、
 これに國立及び事變に關係して傷兵保護院によつて
 新設されたもの並びに民間の療養所の病床を合はせると
 約三萬の結核病床が我が國に存在することになる。

元來結核豫防の効果を確保するためにはその國一ヶ年
 の結核死亡者と同數の結核病床を必要とするといふ結
 核豫防方策の原則に照らして考へる時は、我が國の現在
 の結核死亡一ヶ年約十五萬人に對して療養所の甚だしき
 不足を嘆ぜざるを得ない現況である。

結核豫防相談所といふのは、結核患者を早期に診斷し
 患者及び家族に對して療養並びに同居者への傳染豫防
 に關する指導を與へる機關で、療養所と並んで結核豫防
 上欠くべからざる施設である。我が國ではこの種の施設
 の誕生が甚だ遅れてゐたが、昭和七年以來日本放送協
 會の納付金を財源として公立健康相談所が開設され、

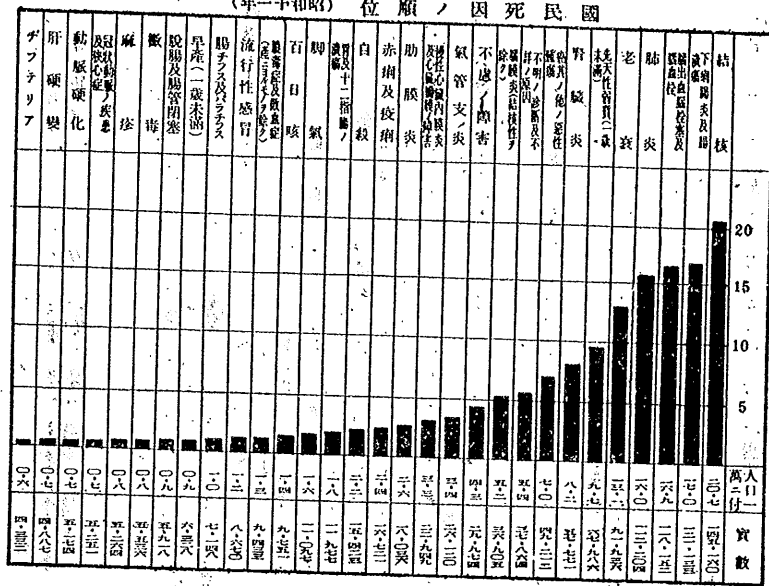
また昭和十二年以來保健所法による公立保健所が逐次設
 置され、これ等を含して現在約二百ヶ所の結核豫防相談施
 設を有してゐる。

また今年度からは大都市に四十ヶ所の「小兒結核豫防
 所」が開設されることになり、今後これ等の施設を増加す
 ることによつて結核豫防事業の振興が期待される。この
 施設も人口五萬乃至十萬に對して一ヶ所を必要とする
 といふ原則に適合せしめるためには今後の擴充を意圖
 せねばならない。

結核豫防思想の普及に關しては、政府並びに民間諸團
 體が努力を拂つて來たのであるが、これに費した
 經費もそれ程は多くなく、従つてその効果も未だ著しい
 ものがない。國民はたゞ結核の怖るべきことを知つて萎
 靡するだけでこの病より身を防衛すべき術を心得てゐ
 ない。國民各人がこの病氣の豫防治療に關する正しい知識
 を獲得し國民舉つて各個人の防衛に努力を傾倒したな
 らば、之による我が國結核防遏上の効果は決して少くは
 ないと考へられる。結核豫防に關する國民教育の必要を
 痛感する次第である。

以上我が國の結核豫防事業は歐米主要國のそれに比し

(年一十和昭) 位順ノ因死民國



て三十四年も立ち遅れてゐる實狀にあり、しかも一般國民として本事業の必要性を認識することも從來甚だ薄かつたのであるが、近時國民保健に關する輿論大いに興り、結核豫防の國家的重要性も強く叫ばれ、従つて結核豫防事業もまさに軌道に乗らんとしつゝある時に當り、特に今回厚生省では「結核課」を獨立させ、結核豫防に對する根本的國策を樹立し、一日も速やかにこの病氣の撲滅の日を迎へようとする努力することとなつた。

山來我が國民は精神的素質ばかりでなく肉體的素質に於いても世界の他の民族に比較して卓越してゐることは民族衛生學者によつて説かれてゐるところであるが、かゝる優秀な肉體的素質も幾多悪疾の浸潤によつて著るしく損はれてをり、その爲めに我が國民死亡率は高く、平均壽命は短く、國家活動力は減退せしめられてをり、國民體位の低下の憂へられてゐる理由もこの點にある。國民體位低下の主要原因たる結核の豫防と撲滅こそ喫緊の急務と考へられるのであつて、今後の結核豫防事業に對して學國的協力を要望してやまない。

第四篇

性病と國民の純潔

病氣の豫防は國民各自の衛生思想に俟つところが大きいであるが、山來我が國では、治療醫學のみ發展して、豫防醫學は顧みられず來た。しかし最近この氣運は大いに改められ、「轉ばぬ先の杖」である豫防の方に重點をおいて國民の保健を守らねばならぬことが提唱されるに至つた。病氣の豫防には身體を積極的に強壯にするほか感染源たる病者を早く治療せしめることが大切で、このため治療醫學の充分な發展が必要條件である。我が國の治療醫學の發達の狀況から見れば、將來豫防醫學の發展も期して俟つべきものがあると思ふ。

性病の豫防に關しては、既に現代の醫學の力を以つてすれば國民各位の協力さへあれば、直ちに歐米のそれを凌駕し得る程度に達してゐると思ふのである。

戦争に伴つて性病が蔓延するといふことは事實で、

その歴史的の實例は少くない。特に歐洲大戰時に於ける歐米各國は、應召者中に性病のため重傷を果し得ぬ者を多く發見したことに端を發して、性病豫防の大運動を起して、國を擧つて本病撲滅の氣勢を上げてゐる。イギリスなどは自らいはゆる紳士國を以つて任じ、口に性病豫防を叫ぶさへ遠慮すべきこととされてをり、娼婦の警察取締を中止し、「イギリスには淫賣婦なし」と空うそをいひてゐたのだが、蔓延の實情をみて大いに狼狽して性病豫防委員會の活動を促し、性病豫防法を發布し、全國に性病診療所を設立して國民は誰でも無料で診療を受けることが出来るやうにした。

性病の統計は正確を期し難いものであつて、その患者数もどの邊まで信用できるかはむづかしい問題である。我が國の現狀に於いて性病が蔓延してゐるといふ數字的根據は求め難いのであるが、例へば昭和十三年度壯丁検査に於ける受檢者の性病罹病率は一〇・八%であ

つてこの数字は昭和八年以来の高率である。昭和八年が満洲事變の年であり、昭和十三年が支那事變の最中で

壯丁花柳病患者累年比較 (徴兵事務課要二課)

年	検査人員	患者数	花柳病
大正十二年	五五五〇四〇	八四一五	一五二六
同十三年	五二九六五四	七五〇二	二二六六
同十四年	五三三〇二〇	七二六一	一三六九
大正十五年	五二四一〇三	六九〇四	一三二七
昭和元年	五八二六八八	六九〇三	一三〇六
同二年	五七二七一六	七二九三	一三〇六
同三年	五八八〇一九	六五二九	一〇七六
同四年	五九八四五五	五九六〇	一〇九六
同五年	六二五七九六	六〇三四	九六四
同六年	六三三六三六	六二八五	九九〇
同七年	六四一四五三	七六六二	一一九四
同八年	六四六九三三	六八一七	一〇五四
同九年	六三六二四六	六八一三	一〇七一
同十年	六八三三三三	五六一五	九〇八
同十一年	六〇六〇一九	五六一九	九六二
同十二年			

あることは申すまでもないが、このやうに戦争や事變に伴つて増加して来るものである。戦争敢行に當つては如何なる大國民でも多少氣持の荒

むもので、この氣分上の缺點と、戦争に伴ふ軍需品工業の發展による經濟上の餘裕が性病蔓延の機会を多からしめるのは事實である。性病は獨り戦争中のみならず戦後にも増加するものであつて、歐洲大戦の際には戦争終了後約二年目の一九二〇年頃歐洲各國の性病蔓延は最高に達し、その後熱心な豫防措置によつて漸減したのである。

我が國に於ける性病蔓延の状況は一般から比較的認識されてゐない。性病の一つである梅毒だけでも昔から「自徳と梅毒氣のない人はない。」とまで云はれるほど多かつたもので、その後特別な豫防事業が行はれてゐないところを見ても、この梅毒がそんなに早く一般國民から消え去る筈がないのである。

事變前の事であるが大坂のある工場で働いてゐる男女職工數千人の血液から梅毒反應を検査したらその一割想像以上である。

「梅毒患者は五十年以上生きない」、「梅毒は十人中一人を斃す」といふ注意はアメリカ合衆國に於ける性病の危害を周知させるために使用された言葉であるが、實際に我が國の統計に於いても直ちに生命を冒す重篤な内科的疾患である心臓病、血管病、神経病、肝臓病等の約三割は梅毒が原因となつてゐると云はれ、精神病的二割は梅毒のためであり、失明の約三割は淋病が原因に入つてゐる風眼の爲めであり、一割弱は梅毒性眼病から来るのである。従つて實社會に於ける最も哀れな部分に屬する人々をつくつてゐる疾病であるにもかゝらず一般人からはそれほど怖れられてゐないのが、不思議に感ぜられるのである。

現在の我が國で一番困るのはこの病氣により惹起される不妊症と死産の増加とである。即ち梅毒患者の子供は十人中六人以上も流産、早産乃至は死産として生れ、育たない。假りに育つても遺傳梅毒兒であつて、虚弱で、低脳、氣狂、盲目、癩癩などで一人前の立派な人間

二分は梅毒があり、職員の方も一割の梅毒患者であつた。東京市大塚の健康相談所で主として結核のため相談にくる人の血液で梅毒の検査をしたら、この場合も一割強の梅毒患者のあることが證明された。また東京市の或る病院の皮膚科で、外來にくる患者の血液を取つて片はしから検査したら約二割に近い梅毒患者のあることが分つた。

これ等の数字によれば我が國成人間に於ける梅毒は約一割あるといふことになるのである。しかし梅毒は潜伏性のものが多く、多くの人は大した苦痛もなく経過するので更に注意し難い。然し梅毒は重い内科の疾患や再起不能な精神病の原因になるばかりでなく子孫に遺傳し、胎兒の内に流産産として死なせる等恐るべき害毒であるので、この點その治療豫防が特に叫ばれる所以である。

淋病患者は梅毒より多い。例へば壯丁検査に於いては淋病五・五に對し梅毒一の割合と云つたやうに淋病の方が常に多い数字となつて現はれてゐる。以上のことから國民の性病患者數は大變な大きな數字になるので、この疾病が國民保健に及ぼす悪影響は

となることが出来ない。淋病による不妊症は驚くほど多く、世間で子なき夫婦の約五割は淋病が原因であつて、淋病は遺傳はしないが子寶が出来ないし、梅毒の方は妊娠はするが、丈夫な子供が得られないのである。

今次事變に於いて故國を後に第一線に勇躍出征中の將士の数は相當な數にのぼることと思ふが、これ等の將士の止むを得ざる不在により、昭和十三年、十四年に於ける我が國の出産數は自然と下向することと思ふ。これを補ふ唯一の方法は銃後を守る人々の出産増加を計ることである。

從來我が國の出産率は世界に冠たるもので、昭和十一年が二九・九で、之に對しイギリス二五・三、フランス一五・〇、イタリー二二・四、ドイツ一九・〇、アメリカ約一七・〇等で、先進國中斷然優位にある。この生れ来る幼児を保護することにより、その死亡率を低下せしめ、消極的ではあるが、人口増加率の減少を防止せんと努力してゐるのであるが、それよりも更に必要なことは、銃後の人々に今までより一層「生めよ、殖えよ」と優秀な子孫を澤山作つて貰ふことである。このために

各國の生産率 (人口千二分母)

年	日本	イギリス	フランス	イタリア	ドイツ	アメリカ
昭和十一年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十三年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十四年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十五年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十六年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十七年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十八年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和十九年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十一年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十二年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十三年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十四年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十五年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十六年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十七年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十八年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和二十九年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0
昭和三十年	29.9	25.3	15.0	22.4	19.0	17.0

性病の撲滅といふことは捨て置き難い問題であるのである。

性病とは梅毒、淋病、軟性下疳、第四性病の四つを指していふ言葉であつて、その原因になる細菌は各病氣毎にちがつてゐる。感染するには汚ない接觸が條件であり、醫學的には病原體である細菌が附着することが條件となるのである。

性病豫防の要諦は、「君子危きに近寄らず」の筆法を最良とする。病毒が永く子孫までも苦しめるのであることを心に銘記すれば誘惑も避け易くなると思ふ。また性病は若者が好きである。實社會の事例から申せば上の空で悪所に入れた人が多くは罹病する。この種の感染が防止出来たらば世の中の性病は半減し得るのである。そこで、性病豫防については、第一に「謹れ純潔」、第二に「忘るな豫防」の言葉を呈したのである。



東亞建設は前途遠大である。堅忍持久長期建設である。我等の使命は、第一線に銃とる將兵と同じで、各工業に、商業に、農業、漁業等銃後の戦線に身を捧げることであり、又更に優秀なる子孫をして昭和の聖業を相續せしめることである。興亞大業の成否は人的物的兩者の總動員にあるが、最後は人の問題にあると思ふ。一部の人が如何に努力しても國民大衆の熱意ある協力がなければ、その協力のためには各自體力の強壯なことが必要である。健康強國とはこの意味であつて、健康を保たない限り、如何に頑張つても萬全の御奉公は不可能である。

頭丈にまかせて休養を忘却すれば結核があるし、元氣に委せて悪所に行けば性病の伏兵がある。身を持するに注意深く、愉快に元氣に働いて、その職場々々を完全に守つてこそ非常時の御奉公である。またこの純潔を守つて以つて將來第二第三の國民の素質の優秀を維持することこそ、眞に我々現代の國民の將來の國民に對する崇高な義務である。



赤色援蔣ルート

外務省情報部

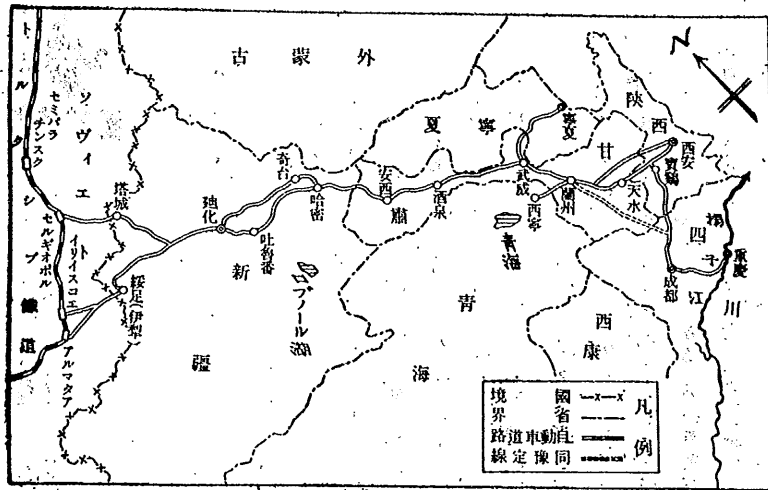
はしがき

皇軍の南昌占領は軍事上は勿論、政治経済上に重大な影響があつた。それまでは蔣政権に好意をもつ第三國の庇護の下に浙江省の寧波や温州を通じて、武器軍需品その他の必要なものをこつそり輸入し、これを浙贛鐵道で奥地に運ぶと同時に奥地の物資を海外に仕向けてゐた。しかるにこの重要な鐵道が南昌でぶち切られたことにより寧波、温州と奥地との交通が杜絶し、その利用價值はほとんど無くなり、蔣政権側は大きな痛手を負つた。その結果外國との輸出入路は、佛領印度支那、雲南ビルマ道路、甘肅・新疆二省を經由するいはゆる赤色ルート（三線のみとなつた。こゝに於いて赤色ルートなるものの重要性が他の二つの線とともに一層加はつて來た。他の二線につい

てはすでに本誌第一二〇號で西南支那の抗日新ルートと題して述べておいたから、今回は赤色ルートだけを語ることにする。

赤色ルート完成

「赤色ルート」といふのは國際共產黨が東亞を赤化する道筋といふ意味で、北はシベリアから滿洲へ、中部は外蒙から北支及び西北支那へ、南は新疆省・甘肅省を通過して中支南支へと、魔の手を延ばさうとしたのであつた。しかし支那事變前まではそれが意の如くに行かなかつたので、國際共產黨と支那共產黨とは局面の打開に苦心さんさんたる有様であつた。それが西安事件と蘆溝橋事件とに乗じて、大局の見えない蔣介石一派をとりこにしたことは周知の通りである。支那共產黨は蔣介石政権と握手した



後、蔣に恩を賣り自分等の活動を便利にするために、蔣政権と協力して後方の聯絡道路建設に乗りだし、上記の地圖に記してあるやうな、ソ聯邦との聯絡道路をすでに造りあげた。この道路によりソヴェト聯邦から軍用飛行機その他の武器軍需品などが輸入され、支那の物産もいくらか輸出されてゐる。その數量については知ることは出来ないが、陝西省の西安から國境附近の塔城を経てソ聯の領内に入り、トルクシブ鐵道のセルギオポル驛に達する道路はざつと六千キロの長距離で、しかもその途中は幾箇所も砂漠を横きり山坂を越えなければならぬから、この間を往來するトラック運送の能率が到底汽車や汽船による運輸と比較にならないことは常識で判断される。だが彼等は今苦しまぎれの死物狂ひでやつてゐるから、こちらで想像する以上の成績をあげてゐるものと考へなければならぬ。そこで蘭州には相當多量の軍需品が到着するといはれ、我が陸の荒鷲部隊が蘭州までも遠征する理由もここにあるのであらう。

ソ聯の對新疆工作

この線がこんなに重要な補血路になることが想像されなかつた以前からソ聯は新疆を重大視して種々の工作をなし、支那の中央政府とは關係なく、新疆省の地方政權との間に早くから秘密裡に了解を得て進出の實をあげてゐた。これは先々代の楊增新時代からのことであつたが、中原に乘出すために新疆省當局者を懐柔する、ソ聯側としては、消極的な表面だけの提携では満足出来ず、積極的な聯絡をつける目的から、巧妙な裏面工作をやつて楊増新を罪り金樹仁を驅逐して、現在の崑崙盛世才を盛り立てた。それが今から六年以前のことと、それ以來ソ聯の新疆に於ける勢力は年と共に發展し、今日となつては第二の外蒙の觀がある。新疆の赤化状態を知る手引として、一昨年同地方に旅行した人民戦線派の杜重遠なる者が、その旅行記を通じて崑崙盛世才のために次の如く辯解してゐる。

新疆に來る前に國內には種々な噂があつて、ある者は新疆がすでに赤化したといひ、またある者はまだ赤化してはゐないが軍事政治の大權は完全にソ聯人の手に握られてゐるといつてゐたが實際に見たところではそんなことはな

く、たゞ物質上及び技術上の援助を運用してゐるに過ぎず、何等の政治的條件も含まれてゐるものではない。この辯護はいはゆる蠍蛇でかへつてソ聯の勢力擴大を證明する有力な材料を提供したものと見える。

赤色ルートと回教徒

赤色ルートの完成、新疆に於けるソ聯の勢力、國共合作、それから最近開始したといはれる重慶、ソ聯を結ぶ飛行郵便聯絡などから見て、赤色ルートの將來は樂觀材料のみが盛りあげられてゐるやうに一應判斷されるであらうが、その内面を深く探つて見れば前途には種々の難關が横はつてゐる。その中の最も大きくかつ殆んど取除くことの出来ない障害は、回教徒の存在である。新疆の人口は大體二百五十萬と計上されてゐるが、その八割すなはち二百萬人は回教徒で、彼等は宗教を否定する共產主義と兩立し難く、さらにソ聯の傀儡になつてゐる盛世才に對し、盛が回教軍を討伐した關係から、彼を深く怨んでゐる。とはいへ現在の盛はソ聯を背景として金力武力の充實せしめ、一時確伏の姿勢を取らざるを得ない。しかし盛

から驅逐された有力者及びその系統の者は、多數印度に亡命して歸國再興の時機を待つてをり、それとこれを合はせて考へたら、何時如何なる事態が突發しないとも限らぬ。それから甘肅、青海、陝西の三省には回教徒が多く、なかんづく甘肅省の回教徒領袖等は軍隊を擁し、政界財界に重きをなす者が少くない。彼等は軍權政權上から蔣介石政權に反感を抱き、宗教上から共產主義と兩立しがたい立場にある。よつて適當な機會さへあれば武力に訴へて反抗すべき可能性があり、徹底的ではないが屢々それを實行に移してゐる。

蔣政權の回教徒對策

この邊の消息は蔣政權側もソ聯側も十分知つてゐるから、二方に威壓を加へると共に他方では懐柔策にも頗る意を用ひてゐる。その懐柔策の實例としては、新疆では盛世才の天下になつて以來時折全省代表大會を開いて、善政の豫約をなし信教の自由を保障するなど回教徒の信頼を得ようといつてゐる。その第三回大會を一昨年十月一日から同七日まで七日間に亘つて開いた。盛督辦側の發表

よれば、この會合に参加した代表者は十四民族で、その代表者は六百六十九人の多數にのぼり、婦人代表者も参列したとのことである。また盛督辦が新聞記者に語つた談話が新聞に出てゐた。その内容は共產黨の口調をつくりで、全省民の抗戰熱は非常に高いやうに吹聴したが、新疆の諸民族は支那語を解せず、その希望條項の如きも通譯付で述べるといつた有様であつて、盛のいはゆる抗戰熱なるものは當局側の提案に對し、何のことも判らずにたゞ形式的に起立賛成したくらのものであらう。要するに彼等代表は税金を多くとられないこと、夷狄視して壓迫を加へないことを約束するためにて來たといふ以外には、何の希望もなく何等の期待もせず、直接不利な結果をもたらすことなき問題には、重税を課せず壓迫しないことと交換條件といつた意味でことごとく賛成するのであると、上海で回教徒から聞かされたことがあるが、恐らくそれが真相であらう。また蔣介石側もいろいろな場合いろいろな方面でそれと適當な案をつくり回教徒の優待尊重を装うてゐるが、あまり効果はないやうだ。去る一月三十日、回教徒といはれる西南行營主任白崇禧をして、全國の教徒に抗戰賛成を要求す

るやう呼びかけると同時に、回教徒を極めて尊重してゐるが如きスタチューアをさせたが、その効果は豫期されない。兎に角、蔣派にしろ新疆省當局者にしろ以上のやうなことをやるのは、畢竟回教徒の心理を知りその反抗を恐れるからであらねばならぬ。

赤色ルートの沿線略述

終りに赤色援蔣ルートの沿線の大都會をその他について少しばかり述べてみよう。

西安は陝西省の首都で、現時の正式の名稱は長安と呼ばれ、西京ともいわれる。人口はさほど多いのではないが歴史的に見て五大都の一つに数へられてゐる。現代的に繁華な都市とはいへないが、それでも、西北地方では商業の中心地となつてをり、陝西の北部の延安に中國ソヴェートの首府が置かれた後、ことに現在のやうに共產黨の勢力が大きくなつてから、人の往來その他で西安は一層活氣づいた。

附近の古跡としては秦の阿房宮、漢の未央宮、漢・唐に縁故のある慈恩寺、唐の三藏塔、漢城の遺跡など数へきれないほどある。また城内外の碑林には多くの古碑が集めてあり、キリス

ト教傳來の歴史を記念する「大冢」も碑林に移され、古碑の集成といはれてゐる。

六盤山は西安から蘭州に行く途中にあり、宋元明が兵を用ひた要害の地である。渭源縣の鳥鼠山から起り北に走つて行く。この山は赤色ルート中の難關の一つでめぐりめぐつて行かなければならないところから六盤の名が生れたといはれる。それでも今は自動車道路が出来て昔とはくらべものにならないほど往來が便利になつてゐる。

蘭州は甘肅省の首都で、現在の名稱は皋蘭と呼ばれてゐる。城の南に皋蘭山が聳えてゐるのでこの名がつけられたのである。城壁の北に黄河が流れてゐる。この地は西安に次ぎ西北第二の商業地とし重きをなし、周以來の古い都會で附近には名勝古跡が少くない。鐵道は陝西の寶雞から少しばかり西に延長されてゐるのみで、蘭州にはまだ汽車の便がない。しかし甘肅省の農産品畜産品の集散地で西に青海省の西寧を控へ、東北寧夏地方との往來があり、四川との交通も次第に便利になり、東は西安に通じ西は新疆に通じてゐるから、この上鐵道が通れば相當に繁榮する見込みがある。この地は邊鄙なところ似て三十數年前に五節から成る鐵橋が架つてゐる。これは時の陝甘總督升允がドイツ

人に請負はせて架設したもので、その工事費に三十萬六千餘兩

(約五十萬圓)かけたことである。何しろ奥地だけに一つの名勝のやうになつてゐる。

酒泉縣城は清朝時代の肅州でその名の示すが如く美酒の産地として知られてゐる。その酒の色は稍緑にして味は甘いといふ。昔は西方各地から入貢する者の通過地であつたが今は都市として取りたてて聳くほどのことはない。たゞこの地に飛行場があることを書くために、この町の名を引張りだしたに過ぎない。

嘉峪關は酒泉の西八九里ばかりのところであり、萬里の長城の西端である。昔は相當にこの關所が重要視された時代もあつて「天下雄關」の碑が残つてゐる。この關を西に出ると砂漠となり、萬里荒漠、人煙稀少の八字によつて表現される光景を呈し、冬だと北風が真向から顔にぶつかり骨を刺して全くやりきれないらしく、この有様を形容して「二たび嘉峪關を出たら、兩眼の涙は乾かない」と唄はれてゐたさうだ。

哈密は天山の南に位し支那本部と新疆各地との交通の要路に當り、附近は沃野が廣く開け、氣候も比較的よく物産に富み哈密瓜はこの附近の名産である。邊鄙な土地としては商賣も盛んなと

ころで新疆東部第一の都會である。

迪化は新疆の首都で、その舊名を烏魯木齊と呼び俗に紅廟ともいはれる。それは城北に赤塗りの廟があるからである。光緒七年(一八八一年)伊犁條約によつて開放せられた對露貿易地である。この地には天津・山西・甘肅・湖南の商人がある。これらの漢人のうちで甘肅人以外は主として清朝時代に回教徒の亂を平定するために派遣せられた軍隊の御用達として隨行した者の子孫またはその關係者である。當地の取引は羊毛、皮革、綿布が主要な商品となつてゐる。迪化が新疆第一の繁華な都會であるところから、小南京ともいはれる。この地には赤化工作に従事する多くのソ聯人がゐると同時に、白系露人も二萬人くらゐ在留してゐるらしい。彼等は母國の革命に際して避難した者及びその家族である。ソ聯が現存辦盛世才と特別な關係のあることは前記のやうであるが、白露人の一隊はソ聯に何等毒にならないので、ソ聯側も支那當局者側もそのまゝにしてゐるとのことである。迪化にはトルコ系の數種族がをり、蒙古人もあれば漢人もゐるといふやうに各種の人種が雜居し、互に言葉はあまりよく通じないらしいが、年と共に支那語の勢力が加はりつゝある。歸するところは漢民族の文化が他の民族よりも高いからである。

國民精神總動員の方策

國民精神總動員委員会は、四月二十七日官報に第四回會を開き、左記の方策を決定、翌廿八日閣議の決定を見た。これは各省國民精神總動員局長をばしめ、地方廳各機關が今後本運動を展開するに際しての基本となるものである。

時局認識徹底方策

國民精神總動員新展開の基本方針に基いて、時局認識の徹底方策を講ずるに當りては、支那事變の本質に對する透徹せる認識に基づき、國の内々に於ける實際の情勢と之に處する我が國の根本目的並びに其の實現方策を普く全國民に浸透するやう各方面に對して、具體的且つ有機的に知らしめ、(一)威權、日本は今容易ならぬ場面に臨んである、世界史上一大時機を齎する最も重大な地位に立つてあること、(二)我が皇國の充分自覺せしむると同時に、「我が皇國の興廢は一に懸つて事變處理の如何に存する。如何なる苦難を忍んでも皇國の精神を世界的に發揚するやう、國民相共に誓つてこの光榮ある任務を成し遂げねばならぬ」

といふ決意を固めさせ、以つて國民の全力を集中發揮して、強力日本を建設しなければならぬ。

一、何を徹底すべきか

(一) 興亞大業の意義と帝國の使命
東亞全局の安定、世界永遠の平和の爲めにする東亞新秩序の建設は、帝國を中心として「日滿支三國相携へ、政治・經濟・文化等各般に互に互助連環の關係を樹立するを以て根幹とし、東亞に於ける國際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、經濟結合の實現を期するにあり」(昭和十三年十一月三日)を以て我が皇國の大理想に淵源する未曾有の大業であつて、之を完成すること、現代日本國民に課せられたる最

も光榮ある責務であること。

(イ) 支那事變の本質

今次の支那事變はその由つて来る處遠く、國民政府多年の抗日今日の根柢に續ける思想は、我が國體と相容れざるものであつて、事變の深刻なる所以亦此處にある。従つてこれが解決には國民政府を徹底的に潰滅して東亞の新秩序を建設しなければならぬ。而して東亞新秩序の建設は、日滿支三國の互助連環關係の樹立を基調とするが飽く迄も日本が指導者であることを念としなければならぬ。

(ロ) 東亞に於ける國際正義の確立

東亞の安定は世界政局上最も必要なことであり、之を實現することが、國際正義の確立である。而して先づ植民地的狀態から東亞を離脱せしめることが、東亞に於ける國際正義の確立の第一歩である。

(ハ) 共同防共の達成

軍備の充實を圍りこれに伴ふ經濟上の離局、戰時財政の實體を正確に理解し、當面における物資需給、物價整調等の諸問題を克服し、國家總動員體制の確立、生産力の擴充に努むること。

二、如何にして徹底すべきか

(一) 以上の點に關し政府は常に時局の進展に應じ新事態の發生と共に伴ふ施策とを一般國民に向つて速かに諒知させること。即ちこれのために、官民各部の啓蒙宣傳機關を總動員してあくまで實效を期すること、殊に權威ある實踐網の整備確立を急ぐことが最も重要である。

(イ) 啓蒙宣傳の徹底

官民各部の啓蒙宣傳機關、別けても新聞雜誌の全的協力を更に強化すること。

(ロ) 實踐網の整備確立

權威あり最も信頼し得る實踐組織を國民各階層の間に整備充實すること

(1) 防共協定は、今後益々強固ならしめねばならぬ。
(2) 東亞に於ける共同防共を確立しなければならぬ。即ち支那共產黨を撃滅し、其の他の東亞各地に於ける共產的分子を掃蕩しなければならぬ。

(ニ) 新文化の創造

新文化創造の要諦は、日本文化を發揮して東亞を擔育するに在る。即ち一方に於いて日本文化を益々醇化發達せしめると同時に、その日本文化を以つて、支那文化其他に新生命を吹込んで更生再建せしめる所に存する。

(ホ) 東亞經濟ブロックの結成

東亞新秩序の建設は、東亞經濟ブロックの結成に俟たねばならぬ。それには日本の指導的立場の確立が根本である。即ち日本經濟の強化を圖ると共に、これに基づいて他の經濟

を指導すべきである。日本と他との關係は、相互扶助の經濟關係を確立するにある。
(二) 國際情勢の轉移と日本の決意
(イ) 援蔣諸國の動向に徴し、帝國の意圖する國民政府の潰滅、東亞新秩序の建設に對する第三國の干渉に對しては、相手の如何を問はず、斷乎としてこれを排除に當る國民的決意を確立せねばならぬ。
(ロ) 世界は今や再び世界戰爭への危機に直面してある。この驟然たる國際情勢に處する我が國としては、独自の立場に據り、東亞に於ける唯一の強國としてその指導的地位を確立し、以つて東亞全局の安定に努力邁進しなければならぬ。

(三) 長期建設の遂行と國力の充實

以上に列挙する大使命を負擔し、長期建設を遂行する爲めには、國家總力の飛躍的増強を期し、就中國防力特に

が緊要の急務である。
(1)既にその準備を見たる方面にありては、これが運用を萬全ならしむること。

(2)中央、地方共に實踐指導者の養成施設に力を用ふること。

(3)指導者の選任には特に意を用ひ眞に適材をこれに當らしむること。

(二)都會生活の特殊性より生じ易き人心の弛緩を克服し、その緊張味を醸成するため、國民の時局認識に逆行するやうな政治的社會的その他の不健全現象を根絶すること。たゞ之が爲めに市民生活の萎微退墜を來たすことなきやう、常に潑刺たる意氣を振作する施設に留意すること。

三、實施上の注意

以上の實施に際しては、次の諸點について一般の注意を加へつゝ、その効果を確保せねばならぬ。

(一)官民各部の啓蒙宣傳機關の總動員に當

(三)空閑地、荒蕪地の活用

國家資源の豊饒の見地よりして空閑地、荒蕪地を積極的に開放することなく、生産的勤務性を促進し、植樹、開墾その他の方法により之が活用を圖る運動を起すこと。

(四)全面的消費節約

時局の現段階に於いては軍需物資、輸入物資、輸出品の消費の節約を極力節約すべきことは勿論、全面的なる消費節約運動を起すこと。

(五)不急品、不用品の活用

不急品、不用品を廃棄することなく、交換買賣等の方法に依り極力その活用を圖る運動を起しなすこと。

(六)廢品の回収

國家に必要なる物資、特に鐵、非鐵金屬、銅、鉛、錫、鋁、アルミニウム等、繊維質(棉花、麻、絹、紙)、ゴム、皮革及び皮革を構成する、廢品回収運動を一層強化すること。
廢品回収への協力については主として廢品取扱業者をして之に當らしめ、業者に團體を組織せしめて之を統制することとし、青少年團、婦人團體等の各種團體は業をして回収せしめることが困難又は不適當なる場合に限り之に當らしむること。

つては、相互に矛盾の起らぬやう調整すること。

(二)時局認識に基づく實踐は形式に流れることを排する。苟くも上り下りがあつてはならぬ。實質的に且つ具體的に各地の情勢に應じ國民各層の實生活に即せしめねばならぬこと。

(三)時局認識徹底の効果は隨時檢討すると共に従来の方法について此の際再檢討を試み是正すべき點は、速かに是正すること。

物資活用並に消費節約の基本方針

緊迫せる國際情勢下に於いて今後の事態に備へ、東亞新秩序の建設に邁進せんが爲めには、國力の増強こそ目前の急務である。それには戰國遂行及び經濟開發その他生産力擴充に必要な資材を確保すると同時に、國民生活の維持、輸出の振興を圖らねばならぬ。

(七)金の集中

金の政府への集中運動を起し、共に、例へば金融設備の充實の如きものを皆地方に工夫を起すこと。

(八)貯蓄の實行

貯蓄運動を更に強化し、百餘萬圓の目標に向つて邁進すること。

二、運動の展開に當り特に留意すべき事項

(一)物資活用並に消費節約の實效を擧ぐる爲めには政府に於いて財政經濟の實情を充分國民に知らしむべきである。

(二)物資活用並に消費節約の趣旨を徹底せしむるに當つては、實行を容易ならしむるため都市、農村等の實情に應じ又對象を考慮して具體的方法を明らかにすべきである。

(三)官公署は率先して物資活用並に消費節約の實を擧ぐると共に、官公吏の實踐運動が緊要である。

(四)本運動に背馳する行爲、例へば買占め、買溜め、遊興等は時局を認識せざる行爲なることを強調し、一般の自肅自戒

我々は須らく現下の物資需給の實情と物價抑制の重要性とを十分に認識し、國民各階層を通じ公私生活の全面に互に徹底せる刷新を圖り、各種物資の活用を全力を注ぐと共に、極力消費の節約を期すべきである。これ日常生活、日常業務の裡に國民精神總動員を生かし、長期經濟戰に耐へる國力を養ふ所以である。乃ちさきに決定せる國民精神總動員新展開の基本方針に基づき、物資活用並に消費節約の基本方針を定めその實行に邁進せんとするものである。

一、物資活用並に消費節約運動の展開

(一)簡素生活の實踐

公私生活の全面的刷新を圖り、質實簡樸なる持節を以つて長期建設に即應せる簡素生活を實行すべく生活刷新運動を起すこと。

(二)物資の愛用

物資需給の現状に鑑み、物資を尊重し各種用品の流用等に努むると共に、一切の生産を排除して物資を完全に消費するの風を奨励し、以つて物の效用を最大限に發揮せしむる爲め物資愛用運動を起すこと。

を徹底するは勿論、之に即應して取締その他の施策を政府に於いて斷行すべきである。

(五)股販産業關係者の生活行動は本運動の成否に多大の影響あるを以つて、格段の考慮と対策が必要である。

(六)本運動を徹底する爲め實踐網の整備とその積極的活動を促すことが肝要である。

(七)物資活用並に消費節約は家庭に於ける主婦の努力工夫に依つ所大なるを以つて、特に婦人に對し積極的協力を求める方法を講ずべきである。

(八)生産、製造、配給、販賣等に携はる業者は物資活用並に消費節約の運動の趣旨に背馳するが如き行爲を嚴に戒しむべきは勿論、本運動をして效果あらしむるやう積極的に協力すべきである。

(九)運動の實績を不斷に調査檢討し、是正すべきものは速かに対策を講じ、不徹底の向に對しては飽く迄も實踐を貫徹せしむるに努むべきである。



東亞資源政策小論

大上 末廣

東亞の鐵資源數十億噸、石炭數百億噸。

東亞の人口五億。

石炭を油に變ずる如き驚くべき日本の科學の力、
等々々。

東亞の資源は實に偉大であり、且つ豊富である。然しこゝで私は、東亞に於ける資源のすべての部門にわたつて論じようとするのではない。資源の一部門たる物的資源、特に富源問題に力點をおいてその重要問題のみを概説することとした。

さて、經濟には個人の私經濟もあれば、また社會の營む經濟もあり、更に國民が一體となつて營むところの營

國家の經濟もある。然しそれらの中で、國の營む經濟が吾々にとつて第一義的なるものであつて、個人の私經濟も社會經濟もすべてこれに從屬する第二義的なるものである。ところで、資源といふ言葉は、學者によつていろいろに解釋されてゐる。けれども私は、資源とは諸經濟生活の中で最も重要な地位を占める國家經濟の源泉をなすものと定義したい。

この定義に従ふと、資源の第一に擧げらるべきものは、國民勞働力と技術とであり、普通この兩者を合して人的資源と言つてゐる。國民勞働力の基本をなすものは、言ふまでもなく、その國の人口であるが、勞働力の能率は、その國民の體力・智力・品性・道德の優劣や男女の別、また人種の差によつて定まるから、これらの體力、

智力等の要素も亦廣く人的資源の中に數へてよい。そして人的資源の他の要素たる技術は、結局、勞働力の特長に發達したものに外ならぬ。今日吾々のもつてゐる技術は、空中の雲を固定して肥料を作つたり、或ひは堅い石炭を液體化して油に變ずる程にまで進歩してゐることは、人のあまねく知る所であるが、我が國の明治四十五年に於ける石炭の埋藏量九十億噸が、その後を於ける調査の精密化と新炭田の發見に依つて、昭和七年に總計百六十七億噸に増加した如きも、全く技術の發達の賜ものであると言はねばならぬ。今日我が國の技術はほぼ世界的水準に到達してゐるのであるが、然し後でも述べる如く、物的資源は極めて貧弱であるから、かくの如き大なる力をもつ技術の發達に一層努力することは吾々國民の義務である。

右の人的資源に對立するものは、いはゆる物的資源である。國家の物的資源の基本をなすものは、人力を待たずして自然に存在する礦物や動植物等の如き富源である。富源の種類と品質は、その國の面積や地勢、地質、氣候等によつて影響されるから、この意味に於いてこ

れらの面積や地勢、地質等のものも亦國家の物的資源を構成する要素と考へてよい。ところで、先に説明した所の人的資源たる勞働力も技術も、時と共に増加することが出来るのであるが、之に反して、物的資源たる富源そのものは、人力を待たずして天然自然に存在するのであつて、人力に依つて増減することは全く不可能である。鐵の出る山を欲しいと思つても、吾々は鐵山を作るわけには行かない。こゝに兩者の根本的差異がある。

このやうに、富源そのものは天然に與へられたものであつて、之を動かすことは出来ないが、只人智の進歩に伴つて自然の地物も次第に富源化して來る。例へば、滿洲國の東邊道に岷々として聳える山がある。この山は、今も昔も變りない天然の地物であり、極く最近までは匪賊と熊との住家として顧みられなかつたのに、滿洲建國後こゝに豊かな鐵礦石の埋れてゐることが發見されて、今は有望な富源となつてゐる。太古ながらの東邊道の山——この自然の地物が、人力に依つて富源化されたのである。

ところで、國家の物的資源の中で最も根本的なもの

は、いま説明した如き性質をもつ資源である。然し、普通の常識では、獨りかくの如き資源のみならず、人間の勞働力と技術によつて資源から生産された資財をも亦、物的資源の一つとして數へてゐる。この意味の資源は第二次的物的資源であつて、鐵材、機械等々から農産物の如きものまでもこれに屬する。學者によつては、この第二次的物的資源を資源の中に加へない人もゐるが、學問的論議はしばらくおいて、私は前の通説に従つて論を進めたい。

二

このやうに、一口で資源といつても、それはいろいろの要素から成り立つてゐる。では、日滿支に於いてこれらの資源は、今日どんな状態で分布されてゐるだらうか。この問題に答へることは、やがて、資源上からみた東亞新建設の問題に答へることとなる。

先づ東亞建設の原動力であり、且つその唯一の指導者たる日本に於いては、人的資源の一つたる技術が、滿支に比較して遙かに優れてゐる。否、單に日本の技術は

滿支よりも優れてゐるのみではなく、世界の各國に比しても決して遜色はない。もとゞゞ我が國の技術の大部分は、明治維新以後歐米から輸入されたものであるが、然し今日ではもはや輸入模倣の時代を過ぎて、獨創の時代にはいつてゐる。例へば我が國の人絹製造技術の如き、十數年の昔には殆んど問題とならなかつたものが、今は世界の最高水準を歩んでをり、そのお蔭で、昭和八年には人絹生産高三萬三千噸となり、遂に米國を凌いだのである。また物的資源の一つたる資財の點に於いては日本は、滿支と比較にならないほどに勝つてゐる。

ところが、人的資源の基本たる勞働力と物的資源たる富源の問題になると、全く趣を異にする。勞働力の質の點では、日本は滿洲國や支那より數等地を抜いてゐるのがあるが、その數量の點に於いても、また仕事に堪へうる體力の強健さや忍耐の點について見ても、滿支の勞働力は勝つてゐる。滿支四億の人口は世界總人口の約四分の一を占め、文字通りの粗衣粗食に安んじながらも勞れることを知らずに働きつゞけるその體力には、正に驚異に値するものがある。富源の點に於いても同様であ

る。我が國で自給自足できるものは食糧資源くらゐのものであつて、鐵工業原料に至つては、まことに貧弱である。世界の石油總埋藏量は約二百五十億バレル（一バレルは三〇ガロン）で、日本の石油埋藏量が僅かにその〇・二割にしかなつてゐないのは、このことを代表的に示してゐる一つの例であらう。之に反して、一たび大陸にわたると、そこには無限の富源が藏されてゐる。

日滿支三ヶ國に於ける資源の分布は、大體以上に述べた通りである。ところで、これらの資源がばらばらに存在してゐたのでは何らの意義もなさない。各種の資源がそれぞれに結合して、生きた生産力となり、國民生活に必要な富が作り出されて、始めて資源は資源としての價値をもつに至る。では如何なる形で日滿支の資源は結合すべきであるか。それは一口でいへば日本の優れた技術と資財―これは主として資本といふ形態をとるのであるが―とが滿支の大陸に渡り、そこに存在する尨大な勞働力と結合して大陸の巨億の富源に働きかけ、かくして生産された富が、日滿支三國民の生活程度と必要に応じて

分配されねばならぬ。

日滿支の三ヶ國が各自別個に生産を行つたのでは、例へば日本が八、滿洲國が一、支那が一、合計十の富しか出来ないので、かく三ヶ國が共同に生産を行へば、その富は三十にもなり、四十にもなるのである。毛利元就の矢の教訓は、こゝでも亦生きてゐる。つまり共同生産の行はれるときは、それだけに日滿支の生産力が向上し、國民生活は豊かになり、従つてまた國力が増進することとなる。そして國力が増進すれば、自ら外敵に對する力も強化するは當然であらう。

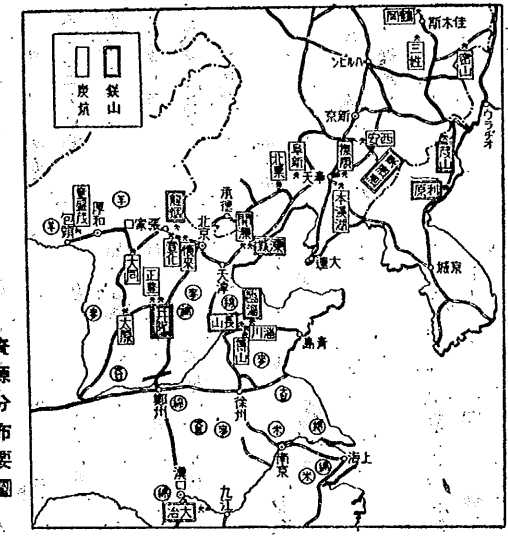
然し問題はこれだけでは留まらない。といふのは、日滿支三ヶ國がそれらに有する資源をもつて各別に生産を行つてゐる場合には、三ヶ國の關係は只貿易によつて僅かに保たれるに過ぎず、従つてそれは極めて稀薄な關係にとどまるが、然し一旦右の如くにこの三ヶ國の資源が結合して共同生産を行ふに至ると、日滿支の三つの國民經濟は互ひに獨立しつゝも融け合ふに至るのである。別の言葉でいへば、そこに三つの要素からなる大國民經濟が成立するのである。滿洲國も新支那も、政治的には

立派な獨立國たることには、些かの疑ひもないし、又それは嚴然たる事實でもある。しかもかかる政治的獨立に、もかゝはらず、經濟的には三者は合一して一大國民經濟を形成するのである。吾々はよく東亞共同體とか、東亞新秩序とかいふことを口にするが、そして又その實現のために努力してゐるのであるが、かかる東亞共同體成立の經濟的基礎は、正にかくの如き根本三ヶ國の資源が提携して共同生産を行ふといふ點に横はつてゐる。そして、こゝこそ東亞資源政策の基調が存在すると私は考へる。

繰返していへば、日滿支三ヶ國の國民生産力を共同に高め、且つその國防力を増進せしめるために、三ヶ國のそれらもつてゐる資源が相結合して共同生産を行ふ所に、東亞資源政策の基本が見出される。けれども、日滿支の資源が結合して共同生産を行ふと言つても、それは決して何らの中心力もなしに漫然と結合するのではない。結合するためには、結合のための中心力が必要である。では、かくの如き中心力を吾々は何處に求めんとするのであるか。一言にして答へれば、その中心力を日

本に外ならぬ。その理由は極めて明白であつて、日本こそ、過去に於いては勿論將來に於いても、東洋の本領を守ることに出来る唯一の安定力であり、その指導力だからである。

日露戦争直前には、恐るべきロシアの勢力が獨り滿

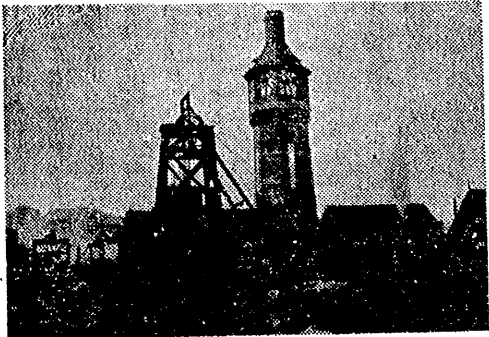


蒙のみならず、朝鮮にまで伸びてきてゐた。このロシアの恐るべき勢力から朝鮮を救ひ、滿蒙を守つたのは日露戦争を勝利のうちに戦ひ抜いた日本であつた。その後三十年にして滿洲事變が起つたが、滿洲事變の眞義は、滿蒙の地になほ蟠居してゐたロシアの共產主義勢力を徹底的にアムール以北に追ひ拂ふと同時に、歐米の資本主義諸勢力を山海關以南に追放して、眞なる東洋の國家としての滿洲國が生誕し獨立したといふ點にある。今度の支那事變は、このやうな意味をもつ日露戦争と滿洲事變の追補戦に過ぎないのであつて、それは本質的には支那をロシアと歐米の侵略から救ひ出すための東洋獨立戦である。支那事變では日本の戦つてゐる表面の敵は、頑迷な蔣介石政権とこれに苟合した中國共產黨ではあつても、このものの裏にはロシアとイギリスが潜んでゐるからである。

支那事變の性質をかくの如く支那をして眞に東洋の支那たらしむるための東洋獨立戦であると思ふべきことに就いては、私はこれまであらゆる機会を捉へて論證してきたし、また舊南京政府も中國共產黨も本質的にはロシアとイギリスの兩勢力の持寄世帯に外ならぬことも、

この事變の始まる以前から私の再三再四論證したところでもある。だから、こゝではこの問題について詳しく論ずることは避けるが、明治維新以後、獨りよく東洋の本領を守りつゝ、東洋の諸民族と諸國家の安定と獨立のために戦つてきたものは、かくの如く、たゞ我が日本の國家と民族のみであつた。若し日本が無かつたら、支那も滿蒙も果してどうなつてゐたであらうか。それが等しく印度と同じ悲惨な運命を辿らなかつたと、一體誰が保證できよう。しかも、過去の歴史の過程で日本の國家と民族が演じてきたこの不滅の役割は、今後と雖も尙ほ繼續して行くのである。

この點に一たび思ひを致すならば、東亞資源の綜合的開發に當つて、その中心力にして且つ指導力たり得るものが、日本を除いて外に在り得ないことは明白であらう。換言すれば、東亞資源政策は、日本の國民經濟と國防力の強化を樞軸とし又それを目標として展開されるべきである。そして、これは何ら日本の利己的要求に出づるのではなくして、東洋の諸民族と諸國家との全體の繁榮が要求する共同命令なのである。



井 陘 炭 礦

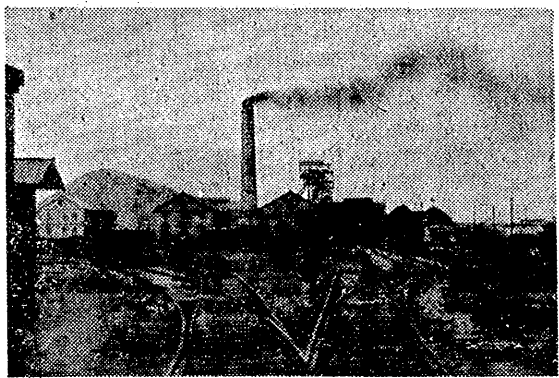
さて、前節で説明したやうに、日滿支三ヶ國の資源は日本を中心として開發されねばならぬことが、明白であるとすれば、日本の優秀なる技術と資財とが、滿支の老なる勞働力と結合して豊富なる富源を現實に開發せんとする場合、その向ふべき生産力の具體的方向も自ら決定されるであらう。然しここで私は、そこに含まれる問題の一切について詳述する邊はないから、如上の立場からみて、開發の急がるべき富源に如何なるものが

あるかを三箇單に説明するにとどめたい。

第一に、近代工業の基礎であり、且つ現下の日本國民經濟にとつて最も必要なものは、言ふまでもなく鐵と石炭である。我が國の鋼材生産高は、商工省の發表によると昭和十一年に約五〇〇萬噸で、ほとり國內の需要を充たすことが出来る。然るに、鉄鋼は不足してをり、鉄鋼を作る原料たる鐵礦石に至つては特に甚だしく、その需要量の八割まではマレー半島、南支、フィリピン、濠洲等から輸入せねばならぬ状態にある。朝鮮の鐵礦床は、大體黃海道西部から平安南道の西方に集中し、また咸鏡道に茂山・利原等の有名な鐵山はあるが、いづれも貧礦であつて、到底我が國の老大な需要を充たすには足りない。従來滿洲の鐵礦も品位はあまり良くはないとされてゐたが、その埋藏量の多い點では朝鮮の比でない。滿洲國の鐵礦床は、奉天省一圓、安奉線及び鴨綠江の東北部等廣く南滿一帶に廣がつてゐて、多くは赤鐵礦又は磁鐵礦と石灰から成る片岩である。最近東邊道の開發が進められるに伴つて、その鐵石が五〇%乃至五五%の富礦であるのみならず、その埋

藏量も非常に豊かなことが發見されつゝある。また熱河方面も有望だと傳へられてゐる。

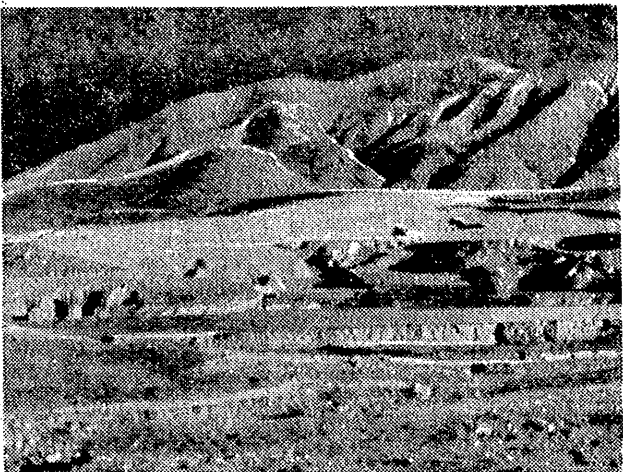
次に支那の鐵礦をみるに、全支の總埋藏量は三億二千二百萬噸といはれてゐる。そして、その約四〇%までが北支那に集つてゐるのであつて、察哈爾には龍烟を中心にして約九千二百萬噸あり、河北省の灤縣、井陘等に四千二百萬噸埋藏されてゐる。然し、北支に於ける鐵礦の首位に位するものは何といつても山東省であつて、臨淄・長山等四縣にわたる金嶺鎮鐵區は、含鐵分六〇%の富礦である。中支の鐵礦をいふ者は、誰しも、第一に湖北省の大冶を挙げる。その埋藏量一千五十萬噸で、品位も五六乃至六二%の優良なものである。以上に概説したやうに普通の鐵礦石は、滿洲國及び中北支那に多量に存在するが、特殊鋼の原料たるタングステンに至ると大いに事情が異なる。タングステンは、朝鮮では平時の需要を充たし得る程度に存在するが、滿洲國及び中北支那には殆んど目ぼしいものとはない。タングステンの産地は廣東と廣西とであつて、世界總産額の凡そ四〇%前後のものがこの兩廣地方から産出される。次は石炭である。日本の石炭埋藏量は、惠まれてを



開 灤 炭 礦

り、數量的には自給自足しうる程であるが、それにもかかはらず、毎年四三〇萬噸前後の輸入を繰返さねばならぬのは、主としてコークス用炭が乏しいからである。つまり石炭問題の中心に立つものは、製鐵事業に缺くべからざるコークス用炭を如何にして調達するかである。

ところで、滿洲國の石炭は撫順に於て代表されるやうに、熱河の承德と哈爾濱を結ぶ線の東南側に集つてゐて、撫順を始め本溪湖、阜新、西安、北票、鶴崗、



龍 烟 鐵 礦

密山等を中心に總賦存量八十億噸とされてゐるが、今後調査の進むにつれてこれが倍加するのは容易であらう。然し、問題の中心たるコークス用炭は滿洲に於いても撫

順、本溪湖、北票の一部に存在するのみで、大した期待はかけられない。

そこで更に進んで北支那をみると、山東省の淄川及び博山、河北省の東部西部、山西省の大同と太原、察哈爾省の宣化及び懷來、綏遠省の重慶茂等、その埋藏量は實に一千三百二十億噸に達する。つまり、支那の石炭の大半は北支に集まつてゐるのである。のみならず、河北省の開票にしても又井陘や正豐にしても、或は山東の淄川・博山について見ても、これらはすべて多量のコークス適性炭を埋藏してゐる。従つて吾々は、萬難を排しても北支那の石炭開發に邁進すべきであり、我が國の石炭問題は、北支を考慮に入れて始めて解決できるのである。石炭と並ぶ燃料資源は、言ふまでもなく石油であつて、石油の重要性は日とともに重きを加へつゝある。日本の油田地帯は、北日本油田、裏日本油田、臺灣油田の三つに跨つてゐるのに、その埋藏量も産額も極めて微々たるもので、殆んど問題とするに足らぬ。然るに、滿洲國や北支に於いても、石油は殆んど全く存在しない。たゞ滿洲國では撫順と三姓からは頁岩が採掘されて、頁岩油が製造されるにとゞまり、他方支那では甘肅

四川、陝西、新疆の各省に石油地帯の存することは既に明らかであるが、これまたいづれも手の届かぬ奥地である。従つて、日本の石油問題は、一方石炭液化事業の進歩と、他方外國からの輸入といふ二つの方法によつて解決せらるゝ外はあるまい。

以上、鐵と石炭について概略を説明したが、最後に附言すべきは、滿洲國でもまた北支那でも、これらの富源は大部分海港から遠く離れた奥地にあるといふことである。だから、その開發には何よりも先づ長い鐵道が敷設されねばならない。そして同時に、巨大な事業設備と勞働力が用意されねばならぬのである。ある學者の如きは、鐵や石炭の問題は、窮極するところ、埋藏量に非ずして、むしろ採掘と運搬に必要な資財と勞働力の供給問題に歸着するとさへ論じてゐる程である。

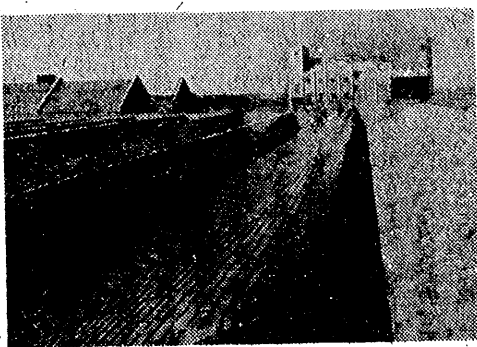
そこで吾々は、鐵と石炭を去つて、大陸の農産資源について論じよう。農産資源には、棉花、羊毛の如き工業原料資源と、米・小麦・大豆の如き食糧資源との二つがあるが、大雑把にいつて、大陸に存在するこれら二つの農産資源は、我が國に對して全く異つた意味をもつてゐる。即ち、大陸の棉花や羊毛は、我が國に於ける輸出産業の大



棉 花 收 獲 (陽 遊)

先づ棉花と羊毛について見る。日本は世界の最大の棉花需要國の一つであるのに、國內では殆んど栽培できないから、毎年八億圓餘りの膨大な棉花を、印度とアメリカから輸入しなければならぬ状態にある。だから、大陸に於ける棉花の増産は、資源開發政策上の重要課題の一つとなるのであるが、最近朝鮮の原棉産額は約二億四千萬斤、

滿洲國は一億二千萬斤位で、いづれも増産計畫を立ててその實現に努力しつゝある。然るに、これら兩地域に於ける氣候その他の自然的條件は、棉花栽培に餘り適してゐないから、朝鮮や滿洲國に對しては遺憾ながら大なる期待をかけることは出来まい。ところが支那の棉作地帯には、これが栽培の障礙をなす如き技術的・自然的條件は存在しないどころか、むしろ棉作に好適な條件をさへ具へ



(島青) 場工績紡海上

てゐる。河北・山東の大平原と揚子江下流以北とに支那棉花生産の中心地區が廣く分布してをり、又その産額も非常に多い。その上、在來棉の品質こそ劣悪であるが、改良種

はその品質印度棉に優るものがあると言はれてゐる。このやうに見れば、我が國に於ける棉花問題解決の一端は、中北支、特に北支に懸つてゐると言ふことが出来る。羊毛に於いても、棉花と大體同じことが言へる。我が國で消費する羊毛は、從來殆んどことごとく、澳洲から輸入されてゐたのであるが、滿蒙及び北支は牧羊業に適してゐるのであるから、それが改良増殖は、決して困難なことではない。因みに、羊と並んで豚、馬、牛等の家畜も從來滿支に多く飼はれてをり、これら畜産業の獎勵は、我が國に不足せる畜産食糧資源や動物資源の解決に資するのである。

ところが、先にも一言ふれたやうに、米・小麦・大豆等の食糧資源の問題に至ると大いにその趣が異なる。食糧資源の一たる米も小麦も共に我が國農産物の大宗たるのみならず、その生産額は國內需要を充たして餘りある。従つて、滿支に於いてこれらの食糧農産物を積極的に獎勵するときは、かへつて我が國の農業を壓迫するに至るであらう。だからと言つて反對に、滿支の食糧生産を無闇に壓迫するときは、これら大陸の諸國民に深刻な影響を與へることとなる。滿洲國も支那も共に農

業によつて立つ國であり、しかも滿支農業の根幹をなすものは、外ならぬ食糧生産部門だからである。だから結局のところ、大陸の食糧農産物資源に對してはこれら農産物の第三國への輸出獎勵と、滿支兩國國民の生活安定のために必要食糧生産を確保しておくといふ程度の保護を加はねばならぬであらう。

四

先にも述べたやうに、アジアに國をなす民族は多いが、その中でたゞ我が日本の民族と國家のみが、東洋の覇權を守り、東洋の獨立のために敢然と戦つてきた。日露戦争・滿洲事變・今次の支那事變は、その一つ一つの階段に外ならぬ。吾々はよく日本の大陸政策といふ言葉を口にするが、その眞義は結局するところ日本が東洋諸民族獨立のために戦つた戦ひに過ぎない。そして、大陸政策の發展は、精神的には日本精神の發露であり、その經濟的結果は、日本國民經濟の伸張である。東亞資源政策は、言ふまでもなく、經濟政策の一つであるから、資源政策の出発點も歸着點も、凡て我が大陸政策の眞義に求められるのである。それは決して一民族の利己的要求に出

づるものでもなければ、況んやまた資本家の資源獲得欲のためでもない。

翻へつてみるに、滿洲國では既に國家の綜合的計畫の下に、大規模な産業開發が着々と進行しつゝある。北支那と中支那に於いても、組織的な資源開發が既にその緒につかんとしてゐる。そしてこれが、大陸に於ける長期建設の一具體的姿様でもあるが、かくの如く東亞の資源開發は、早くも實行の時代にはいつたのである。

ところが、こゝで吾々の強く注意すべきことは、資源の開發は單に物の開發としてのみ留まらず、それは當該國民經濟の根柢にまで深刻な影響を及ぼさずには掛かぬといふことである。例へば、滿洲國の東邊道で鐵礦が採掘され、製鐵事業が創められると、先づそこに鐵道が敷かれるやうになるし、またこの製鐵業を培養するために幾つかの他の從屬産業も必要となつて来る。同時にまた、農民は農民たることをやめて、それらの鑛山や工場に勞働者となつて働はれて行き、そのために舊來の土地制度も徐々に變化して行く。農業資源の開發の場合にも同様の現象と變化が生ずる。例へば北支那に積極的な棉花の増産を行ひ、牧羊業を發達せしめんとするには、品

種の改良、灌漑施設の完備、防疫設備の普及等々の技術的方法の實施を必要とすること勿論であるが、然しその根本的政策としては、舊來の農牧畜經營組織そのものに一大改革を加へねばならぬのである。棉花栽培にしてもまた牧羊業にしても、いづれも比較的大規模な經營でなければ、合理的にやつて行くことは出来ないのに、滿洲國や北支那の農業經營は、驚くほどささやかなものだからである。

ところが、滿支兩國國民經濟が今日如何なる發達段階に在るかに就いては、未だ學說の一致をみないが、兩者は共に、その中に特殊な近代的要素を含みながらも、尙ほ本質的には恰も我が徳川時代の末期と同一の状態にあると私は見てゐる。かくの如き過渡的な状態に在る滿支兩國國民經濟の根柢に、右に説明した如く資源開發が深刻な影響を與へるとすれば、吾々は、この兩國國民經濟を今後如何なる方向に導いて行くべきであるか。また同様に、資源開發が滿支兩國國民の舊來の秩序に根本的な動搖を與へるなら、吾々は、それに代るべきより良き新秩序を如何にして作るべきであるか。最近しきりに東亞の新秩序といふ言葉が流布されてゐるが、それは雲の上の迂

遠なことではなくして、かくも現實に喰ひこんだ深刻な生きた問題なのである。

私は、この小論の到る處で、東亞資源開發の指導者は、吾々日本國民であり、またそれは我が國民經濟の發展といふことを目標にして押し進められねばならぬことを説いた。若しこの説にして正しいならば、東亞に於ける組織的にして大規模な資源開發の過程で發生する如上の諸問題を、正しく解決すべき責任者も亦、我が國民でなければならぬといふ結論も無條件に正しい。問題を與へる責任者も、問題を解く責任者も、ひとしく吾々國民に外ならぬのである。だが、吾々國民は、問題が困難であり、複雑だからといって、些かも右顧左盼して迷ふ必要はない。私が再三繰返して説明したやうに、大陸の大規模な資源開發が我が高遠なる大陸政策の命ずるところであり、しかもこの大陸政策が常に金剛不磨なる日本精神に立脚してゐる限り、與へられた問題を解く鍵も亦、外ならぬ我が日本精神の中に横はつてゐる筈である。それ以外には斷じてあり得ないし、又それ以外に逸脱することも許されない。

(筆者は東亞研究所員)

最近公布の法令

内閣官房總務課

- ◇朝鮮總督府衛生院官制中改正ノ件 三月二十四日勅令第七十號
- ◇昭和十四年法律第十號滿洲國ニ於ケル領事官ノ裁判ノ廢止ニ關スル法律施行三關スル件 三月二十四日勅令第七十一號
- ◇滿洲國に於ける領事官の裁判の廢止せらるゝに伴つて本年四月一日現に滿洲國に駐在する領事官の管轄權を有する訴訟事件及び非訟事件に關する事務並びに登録事務の朝鮮總督府裁判所又は關東法院に於ける管轄の區分を定むる等、本法の施行に必要な規定を制定したもので四月一日から施行せられた。
- ◇樺太廳師範學校官制 三月二十五日勅令第七十二號
- ◇高等官官等俸給令中改正ノ件 三月二十五日勅令第七十三號
- ◇樺太に於ける初等教育の現狀に鑑み眞に樺太拓殖の特殊事情に適應する優良なる小學校教員を養成し、併せて管内初等教育の研究指導機關たらしむる目的を以つて、樺太廳師範學校を改置しその職員として學校長、教諭十一人、舎監(教諭を以つて充てる)及び書記一人を置き昭和十四年四月一日より施行することとし、且つ之に伴つて學校長及び委任官たる教諭の官等俸給を定めたものである。
- ◇昭和六年勅令第二百七十一號陸軍兵ノ兵科部、兵種及等級表ニ關スル件中改正ノ件 三月二十五日勅令第七十四號
- ◇輜重兵特務兵及び補助衛生兵の兵種を廢止し從來のこの種の兵種はすべて輜重兵又は衛生兵とし、從つて等級も上等兵、一等兵、二等兵の如く他の兵種と同様とすることとしたもので、本令施行の際(三月二十五日)現に輜重兵特務兵、一等兵、二等兵たる者はそれ々々輜重兵、一等兵若しくは衛生兵、二等兵、補助衛生兵、一等兵、二等兵もそれ々々衛生兵、一等兵若しくは衛生兵、二等兵となった。
- ◇兵役法施行令中改正ノ件 三月二十五日勅令第七十五號
- ◇兵役法の改正並びに陸軍兵の兵科部、兵種及び等級表の改正に伴つて兵役法施行令中短期現役兵に關する規定の削除、現役兵及び第一補充兵の徵集に關する規定その他學校在學者の徵集延期に關する規定等の改正を行ったものである。
- ◇海軍志願兵令中改正ノ件 三月二十五日勅令第七十六號
- ◇兵役法の改正等に伴つて海軍志願兵の豫備役四年を五年に、後備役五年を六年に改め、又飛行機科練習生たることを志願する航空兵は霞ヶ浦海軍航空隊に入隊せしむることとする等の改正を行ったもので、三月三十一日から施行せられた。
- ◇海軍武官服役令中改正ノ件 三月二十五日勅令第七十七號
- ◇警備其の他の必要に因り歸休中の下士官を召集するも尙ほ必要の場合、服役第一年度の者に限り召集することが出来ることとしたもので三月三十一日から施行せられた。



露光量違いにより重複撮影

官報編纂圖書だより

▼列國國勢要覽(内閣統計局編)殆んどあらゆる方面の統計を各別に網羅し、掌中に収まるくらの冊子にまとめたもので便利至極なものである。例一八七頁、定價十五錢送料不要、發行、内閣印刷局。

▼會計検査法規集(會計検査院編)會計検査に關する諸法規を輯録せるもの、加除式として改訂に従つて補正できるやうにしてある。主要目次
會計検査院設置法、會計法及會計規則、物品質計、因有財產、計算規則規定、收入支出及出納官吏、契約、保管及供託、債務及債權、金庫、臨時經濟二開示法、公費諸法現(例二〇〇頁、定價四圓五錢送料内地二十二錢、發行、内閣印刷局)。

▼再起の勇士(傷兵保護院編)戦傷を負つたり病氣になつたりした傷兵軍人のために、傷兵保護院の事業をわかりやすく説明したものである。傷兵軍人のみでなく一般國民も知つておくべき事柄が多い。(例六六頁、七頁、添葉者、は切手三錢封入傷兵保護院事務課へ御送付のこと)。

文部省推薦圖書紹介

▼支那事變歌集(歌集)日本歌人協會編)作者は、戦地にある將兵をはじめ、應召

者、現役入隊者、現地居住者、從軍看護婦、宣撫班員、從軍記者その他を包含してをり、戦地歌の代表作は殆んど本集に集められてゐるといつてよい。本書はその意味で事變に際會した國民の心を後代に傳へる最もよい記念であらう。(例四一八頁、定價二圓八十錢送料十四錢、發行、東京市芝區新橋七ノ二、改訂社、振替東京八四〇二五)。

▼結核は必ず癒る(保險院編)厚生省保險院で懸賞募集した結核征服の實話三十篇を集めたもので、國民病とまでいはれる結核を苦心慘憺いろ／＼に工夫して克服した経験談である。現在療養中の入々にとつては大きな慰安であるとともに全快への啓蒙策ともならう。(例四〇四頁、定價二圓送料三錢、發行、東京市牛込區矢來町、新報社、振替東京八〇八五)。
再録―第二〇號未編、文化哲學の諸問題、下巻書名へ「現代文化と國民教育」添す。

- ☆磯の香に泳ぐ鯉魚
 - ☆長期職と健康
 - ☆正しい育児
 - ☆天皇陛下下踏國神社に行幸
 - ☆青年學校は君等を持つ
 - ☆海外通信
- ☆讀者のカメラ
―定價十錢―

週報	定價	申込所	御注意
昭和十四年五月三日印刷發行 ■編輯者 内閣情報部 東京市麹町區永田町 内閣總理大臣官舎内 ■印刷者 内閣印刷局 東京市麹町區大手町	一部 五錢 半年(前金) 一圓二十錢 一年(前金) 二圓四十錢 (外購郵便に依る場合は一ヶ年四圓八十錢) 半年分未滿回送郵券の方は一部五錢の額金を以て前金を添へ御申込み下さい。	内閣印刷局發行課 電話九ノ内三三二―一九 振替東京一九〇〇番 全國各地官報販賣所 東都書籍株式會社 東京市神田區錦町一ノ三三 振替東京九三九〇番 各書店・驛賣店	▲本誌より贈物の場合は必ず「國報附録より贈物」の旨を明記し、且つ右機軸を内閣情報部編輯課宛三封筒送付下さい。 ▲本誌記事の無断翻録は許されず、本誌記事に對する御意見を編輯部に附しての御意見も、週報附録欄を知らせて下さい。 ▲國報を他へお送りの場合は郵税一圓五厘▲本誌へ廣告料を納む場合は内閣印刷局へ

週

報

昭和十一年十月三日
昭和十一年五月三日
（毎週一回水曜日に発行）

内閣印刷局印刷發行



(判[A5]格規定國はさ大の書本)